
パーフェクト

ムライリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーフェクト

【Nコード】

N16080

【作者名】

ムライリカ

【あらすじ】

東京の大学に通うため、古めかしいアパートに越してきた村越隆一郎。管理人の水木詩織に一目惚れし、優しい住人達にも歓迎されます。

しかし、その一方で住人達はある計画を企んでいるのです。

1. あいさつ

3月末日のとある日曜日。進学のために田舎から都会へ上京してきた僕は、これから新しく住むこのアパートの住人に挨拶周しようと思っていた。

新しく住むとは言ったものの外見はちょっと古めかしい。

軽く調理出来そうな流し台と、4畳半のスペースに押入れ1つ。

今やそのスペースすら段ボール箱で殆ど占領されているが。

とりあえず必要な物を取り出してから挨拶に行こう。

本当は昨日の内に、このアパートの管理人さんだけでも挨拶しておきたかったのだが、僕がここに着いたのが夜中の11時過ぎとめっぽう遅かった。流石にその時間帯に挨拶するわけにはいかない。

「タオルとかはありきたりだからクッキーにしてみただけ……皆さん喜んでくれるかなあ」

僕はあぐらをかきながら、割れてはいないかと1つ1つ慎重に吟味を始めた。

僕は4月からこの近くの大学に通うことになった田舎者だ。実家は農業を営んでおり、昔から大学進学は難しいと親に言われていた。しかしどうしても都会に憧れた僕は、東京の大学に受かる事を条件に家を出た。

最初、東京の大学に受かった時は夢にまで見た大都会、東京での一人暮らしに胸を踊らせた。

だが今はすっかり大都会の波に飲まれていた。あまりの人の多さと、電車の乗り換えの多さで僕はここに着く事もままならなかった。

昨日このアパートにたどり着く前、僕は何人かの人に道を尋ねたが、中には僕の事を無視したり、軽く煙たがったりする人もいた。この田舎者がとも言い下げに。

東京の人は冷たいとよく耳にするが、昨日身をもってそれを体感した所だった。

「この住人はそんな人達じゃないといいけどなあ……」

まだ見ぬ住人の事を考えながら、僕はクッキーの袋を5つ提げて部屋から出た。

僕が住む部屋はこのアパートの102号室。

1階と2階に3部屋ずつの計6部屋がこのアパート全体の構造であった。

管理人さんの居る部屋は隣の101号室だ。僕はまず昨日挨拶に来られなかった事を詫びようと自分に誓ってから、ドアの隣にある呼び鈴を2回押した。

しばらくしてぱたぱたと足音が聞こえ、部屋のドアが開けられる。

「あら……貴方が引っ越してきたお隣の村越隆一郎君かしら？」

ドアを開け、僕のことを見るなり女性がそう言った。僕は驚いた。管理人さんと聞いていたのでてっきり年配の方かと思いきや、恐らく三十代前半だと思われる美しい女性がそこには立っていたからだ。

「あ……はい、昨日挨拶に来ようと思ったのですが、何せこちらに

着いたのが真夜中になりまして……………すみません」

お恥ずかしいと言わんばかりに僕は頭を下げる。

「そうだったのね。私は水木詩織。ここの管理人をしております。……何か分からないことがあったら、気軽に訪ねてきて下さいね」

セミロングの茶髪を耳にかき上げながら、ニコツと管理人の水木詩織は微笑んだ。

……何て綺麗な人なのだろう。この貧粗なアパートが一瞬にして高級マンションに見えてしまった。

「あ……これ挨拶がわりのクッキーです。普通はタオルとかですけど……こっちの方が選り好みしないし、邪魔にならないかと」

「ふふ、ありがとうございます。後で紅茶と一緒に頂きますね」

そう言って管理人さんはクッキーを大事そうに抱えた。こんな美人が管理人とは僕はなんて知っているのだろう。

隣の住人が美人なお姉さんだと知り僕は胸が躍った。

「では失礼します」

そういつて管理人さんは部屋に戻っていった。

僕も一礼してからその場を立ち去る……すぐドキドキした。

あんな美人がお隣さんだとは！いけないことを考え始めた自分に、まだ4人も挨拶に回らないといけないと叱りつけると、再び身を引き締めて今度は反対側の103号室の呼び鈴を押した。

『……はい』

しばらくしてから声が聞こえた。声からすると男性みたいだ。

僕は怖い人ではないようにと祈りながらその人が出てくるのを待った。

「すみません遅くなって。少し片付けをしていたもので」

そう言って出てきたのは、若くて背の高い爽やかな青年だった。

僕はその爽やかオーラに圧倒されながらも自己紹介を始めた。

「お隣に越してきた村越隆一郎です。よろしくお願いします」

「俺は岡島隼人。近所の大学に通う3年生です。よろしくね」

「あ、僕も4月からその大学に通う1年生です。……先輩ですね」

僕たちは互いに笑いながら握手を交わした。

同じ大学の人が隣に住んでいるのは僕にとって頼もしい限りだ。

聞くところによると学部は違ったけど、この人とは仲良くやっていけそうだ。

「これ、挨拶代わりのクッキーです。お口に合うかどうかわかりませんが……」

「……わざわざありがとうございます」

岡島隼人は舌なめずりをしてからクッキーを受け取った。

「また大学の事とかで聞きたい事があったら遠慮なくおいでよ。相

談とかにもものるからさ」

最後まで爽やかな彼はそう言って部屋に戻っていった。すごく良い人そうだ。

ここへ来る間に道を尋ねた人達とは雲泥の差だった。

「いいお兄さんって感じの人だなあ」

とりあえず隣の住人が優しい人達でよかった。僕は胸を摩りながら2階への階段を上がった。

201号室と書かれた部屋の呼び鈴を強く押す。

「はい……」

これまた僕と同年くらいの、今度は女性が現れた。前髪が長くて眼鏡に少し被さっている。

そして顔に似合わずとても大きなマスクをしていた。花粉症か何かだろうか。

少ししか部屋のドアを開けない所を見る限り、僕の事を警戒しているようだった。

「あの……何か？」

女性が訝しげに僕の事を睨みつける。

僕はさっさと済ませてしまおうと自己紹介を手短にした。

「……そういえば管理人さんが新しく下に越してくるって言ってたわね。貴方がそうなんだ……」

女性は僕の事をじろりと見るなり、ふーんと独り言のように呟いた。

「はい、昨日こちらに越してきました。よろしくお願いいたします」

「……こちらこそ。私は畑野曜子と言います。」

相変わらず数十センチの隙間から彼女は一礼した。

僕もそれに合わせて一礼をする。

「あの、これ挨拶代わりのクッキーです。よかったらどうぞ……」

彼女は鼻を吸りながら片手で受け取る。

「……ありがとうございます」

彼女は礼を言うなりさつさと数十センチの隙間を閉ざしてしまった。僕は最後まで彼女に警戒されていたみたいだ。

何だか少し暗い感じの人だったなあと思いつつ、続けて隣の呼び鈴を押した。

「……あれ？」

ピンポン。ピンポン。……何度押しても呼び鈴の音だけが虚しく響くだけだった。

どうやら僕の上に住む202号室の住人は部屋にいないらしい。

しょうがない、面倒だがまた夕方くらいにでも来よう。僕はクッキーの袋を2つ提げて最後の部屋へと向かった。

ピンポーン。僕が呼び鈴を押すなり、男が慌しく出て来た。

「何だ小僧、何か用か」

眉間にシワを寄せて、お世辞にも穏やかな人とは言えないおじさんだった。

僕はいきなり怒鳴られた事にびっくりしながらも、下の階に引越して来た事を告げた。

「何だ、新しく引越してきた小僧か。いきなり怒鳴ってすまなかったな。昨日新聞の勧誘が来たもんだから、今日も懲りずに来たのかと思っちゃったぜ」

五十代くらいの、割と体格のいいおじさんが僕の頭を撫でた。先程の厳つい態度とは裏腹に穏やかな表情だ。

僕は何だかお父さんに頭を撫でられている様な感覚を覚えた。

「俺は沼地源蔵。この近くの建築会社に勤めている男だ……まあ今日は休みで家にいるがな！」

僕はこれ以上このおじさんに絡まれまいと、一步退いて挨拶をするが、おじさんは尚僕の肩を抱いて絡んできた。

「村越君年はいくつだね？よかったら今日の晩にでも一杯飲もうじゃないか」

「あはは。お誘いは嬉しいですが僕、未成年ですので……」

口から酒の臭いがつんと鼻にくる。こんな昼間からもう飲んでいるのか、この人は。

僕は多少の呆れを覚えながらクッキーをさっさと渡した。

「お、小僧気が利くじゃないか。……ん？何だクッキーかよ」

酒のつまみを僕に期待されても困る。

「……それではこの辺で失礼します。まだ片付けが残っていますので」

僕が軽く一礼すると、おじさんはつまらなさそうな顔をして僕を見送った。

……もう少しくらいかまってあげても良かったかな。いやいや、あんな酒飲みにかまっていたら、今日中に終わるはずの片付けも終わらなくなってしまう。

僕は一息ついてから自分の部屋に戻った。

2. 202号室の女

「今回の勧誘はえらい粘ったわね、源さん」

先程僕が訪れた203号室の奥の部屋から女性が声をかけた。

「聞こえてただろ、今のは勧誘なんかじゃない。下に新しく引っ越してきた小僧だ」

そう言ってサングラスをかけたロングヘアーの女性の前に、クッキーの袋を放り投げた。

「何？」

「クッキーだとは挨拶代わりの。なかなか可愛い小僧だった」

「ふーん……じゃあこれ、あたしも貰えるのね」

そう言いながら源蔵の受け取ったクッキーを勝手に開ける。

中からは人型の可愛い男の子のクッキーが出て来た。

「お前も挨拶すればよかったじゃないか、隣に住んでいるのによ」
「嫌よ！勘違いされるに決まってるじゃない」

「いきなり飲もうと言って上がりこんで来たのはお前の方じゃないか。あの小僧に呆られたよ、昼真っから酒飲んでって態度で」

「いいじゃない別に。本当の事なんだし」

女性は手に取ったクッキーの左手を折った。

「それよりその引っ越してきた子、完璧だったの？」

「完璧？」

「とぼけんじやないわよ。どう考えたってこの時期に越してきた奴を使うに決まってるじゃん……」

「……………」

源蔵は両腕を抱えた。そして擦る。

「確かにお前の言うとおりかもな。でも最終的には管理人が決める事だろう」

「あの女ならやるね、絶対」

クッキーの右手を折る。ついでに両足も。

ぽきっと乾いた音と共に、クッキーの粉末が辺りに散らかった。

「こらっ！机を汚すな馬鹿野郎。カスがいっぱい落ちてるじゃないか」

「あたしには見えないわ」

「食べ物で遊ぶな！」

源蔵は女からクッキーを取り上げる。

手元からおもちゃが取り上げられると、女はつまらなさそうにまた酒を飲み始めた。

「定期的に飲みに押し寄せてくるのもやめんか。お前みたいな若い娘が、こんな親父の部屋に来るべきではないぞ」

「また説教するつもり？しょうがないじゃない、ここでは飲める相手が源さんしかいないんですもの」

そう言って残りのお酒を一気に飲み乾した。

女の足元にはもういくつかの空の缶ビールが転がっている。

「俺の娘より質悪いよ、お前は」

空の缶ビールを拾い集めながらぼやく。

「ふん、お褒めの言葉として受け取っておくわ」

女は少しずれたサングラスをかけ直した。

自分の上の住人を除いて4人、僕は挨拶をしてきた。

まずは101号室に住む管理人の水木詩織さん。

僕の隣の103号室に住む岡島隼人さん。

そして201号室の畑野曜子さん。一つ飛んで203号室の沼地源蔵さん。

「……そういえば202号室の表札には竹中って書かれていた気がするなあ」

留守だった部屋には後程挨拶に伺おう。とりあえず今は片付けが先だ。

なんとか今日僕が寝る分のスペースは確保しないと。

僕はどこから手をつけていいのかわからない段ボール箱を、手当たり次第開けていった。日用品だけでも頑張っ取り出そう。

「はあ……それにしても管理人さん美人だったなあ……」

隣に美人なお姉さんが住んでいる。それだけで世の中の男達はテンションが上がる。

僕もその内の一人だった。

「管理人さんは結婚してるのかなあ……」

何となく管理人さんの顔が頭から離れない。

確か指輪はしていなかった気がするが……どちらにしろ男はいそうだなあ。

「いかんいかん。こんな事考えてたら片付けが進まない」

僕は頭を左右に振って管理人さんを頭から追いやった。

「……よし、とりあえず必要な物は取り出せたぞ！」

僕はとりあえずガッツポーズをとりながら、多少スペースの空いた畳に寝ころびがった。

肩が凝っている。昨日重たい荷物を一日中背負って歩き回っていたせいだろう。

思い出しただけでも疲れがどっと出てきた。

「ぎゅるるるるっ……」

僕のお腹の音が部屋全体に響き渡った。そういえば朝から何も食べていない。

僕はうるさく騒ぎ立てるお腹に手を当てて抵抗する。……この辺りに食べるところがあったかな。

『ピンポン』

何を食べようか考え始めた矢先に、突然呼び鈴が鳴った。

『コンコン……管理人の水木です。村越君居ますか?』

管理人さんだ!僕は今までに見た事ないような速さで起き上がるとドアを開けた。

「はい、何か御用ですか?」

そこにはエプロン姿の管理人さんが立っていた。

「お昼はもうお済ですか?よろしければこれから引越し祝いにお蕎麦でも作ろうと思えますけど……一緒にどうですか?」

トントントントン……。

僕は今、隣の101号室。つまり管理人さんの部屋にお邪魔している。

女の人の部屋に上がる機会なんて今までなかった僕には、全くの未経験ゾーンだった。

こんな僕のためにお蕎麦を作ってくれて、しかも一緒に食べようと言ってくれたのだ!なんて優しいのだろう管理人さんは。彼女のエプロン姿が見られただけでも僕は大満足だった。

「もうすぐ出来ますから、あと少しだけ待っていてくださいね」
「はっ、はいっ」

声が思わず裏返る。変に緊張して否応が無しに辺りをきよろきよろと見回した。

管理人さんの部屋は全体的に白で統一されていて、所々に花模様が散りばめられている。

典型的な女性の部屋と言っているのだろうか。僕の抱いている管理人さんのイメージにぴったりだった。

「ん?……」

小さいキャスター付きの引き出しの上に、写真立てが置いてある。その中で若い男がこちらを優しそうな顔付きで見ている。……誰だろうあの男の人は。
もしかして管理人さんの恋人じゃ……。

「できましたよ」

管理人さんが御盆を持って畳の部屋に上がる。

僕は管理人さんの手伝いをした後、お互いに向い合って食べ始めた。

「んんっ! 美味しいです。これならいくらでも食べれそうです!」

「ふふ、お蕎麦一つでこんなに感動してもらえるなんて嬉しいわ。

まだこちらに来たばかりですから、スーパ―の場所も知らないと思います。……ご迷惑じゃなかったですか?」

「とんでもない! こんな美味しいお蕎麦ご馳走して頂きありがとうございます
ございます」

僕は箸をわざわざ置いて深々と頭を下げた。

「ちょっと大袈裟よ、村越君」

管理人さんは笑って僕の体を起こした。ああ、何て幸せなのだろう。こんな美人な人が僕の彼女だったらなあ……僕は先程見つけた写真の中の男をチラリと見やると、思い切って管理人さんに聞いてみた。

「あの……写真の人は……？」

「え？……ああ、うちの主人よ」

しゅっ主人！？……やっぱりこんな素敵な女性が結婚してないはずないよなあ。

「でも……一年前に先に逝ってしまったの。……病気で」

「えっ………」

「このアパートの管理人もね、もともとうちの主人がしていたのよ。主人が亡くなって一度は出払おうとも考えたけど………やっぱり居心地が良くてね。私が代理で管理人を務めさせてもらっているのよ」

「そう……だったんですか……」

もう一度写真の中の男を見た。今も管理人さんの近くで見守っているのだろうか。

「すみません、僕が管理人さんの事情も考えもせず変な事聞いてしまっ……」

「いいのよ。もう過ぎた事ですし………そういえばこのアパートに、裏庭があるのはご存知かしら？」

「はい、桜の木が一本ありますよね」

僕が知っているのを確認すると、管理人さんは立ち上がって南側の窓を開けた。

春風と共に桜の花弁が数枚、部屋に舞い落ちる。

「あの桜、うちの主人が大切に育てていたのよ。このアパートが建つ前からあったみたいで」

「そうなんですか……あれ、幹の所に字が彫ってある………サリー？」

「えっ……凄いい村越君！よくあんな所に書いてある字が読めたわね！」

「あはは。僕昔から目は良い方なので……サリーってもしかしてあの木の名前ですか？」

「そうよ。主人が勝手に命名してたけど………今年は去年にも増して満開ね」

管理人さんが春風と共に髪を掻き上げる。その仕草が何とも切なくて、僕は胸を締め付けられた。

「……………何か、男手の必要がある時は言って下さい。こう見えて僕、力のある方だと思いますし」

そう言いながら、何とも頼りない力こぶを管理人さんに見せつけた。

「ありがとう村越君。そうね………ここでの生活が慣れてきたら、草むしりでもお願いしようかしら」

僕と管理人さんは微笑み合ってしばらくの間桜を眺めた。

「……………帰るわ」

そう言うなりサングラスの女は立ち上がった。
源さんは酔い潰れてしまったのだろう、近くから大きな寝息が聞こえていた。

自分の置いた缶ビールの配置を思い描いてから、2歩下がって右を向いて5歩進む。

ここには柵があるから左に2歩進んで前に4歩。あった。日頃のお供のステッキ君。

ちなみに名前はまだ無い。

「レディより先に潰れるなんて、駄目な男」

捨て台詞を吐いて女は部屋から出た。出た瞬間に左から誰かが階段を上がってくる足音が聞こえる。

……このリズムは今まで聞いたことが無い。誰だろう。勧誘の人でもなさそうな感じだ。

女は部屋に入らずにじっと待ち構えていると、遠くの方で「あっ」と声が聞こえた。こちらに向かって走ってくる。

「……あなた誰？」

「僕は下の階に引っ越してきた村越隆一郎と言います。お会いできてよかった。これ、つまらない物ですがどうぞ……」

ああ、下に越してきたクッキーの人か。

「どうも。あたしは竹中杏里。残念だけどあなたの顔が見えてないの。これ、中に何が入ってるの？」

手にした袋を外からごそごそと確認するフリをする。

「え……あ、クッキーですよ。お口に合うといいですが……」
「ふーん……ありがとう」

杏里はそのまま部屋に入ろうとして、でも面白い事を考えついたのでやめた。

「あ、そうだ。あんたお酒は飲めるの？」

「僕ですか？……ごめんなさい未成年ですので……」

「じゃああたしの代わりに買ってきてくれる？おっさんみたいなガラガラ声出せば買えるはずだから」

杏里はそう言って財布の中から千円札を一枚取り出した。

「ええっ……未成年はお酒も買えないですよ？」

「じゃああたしが行けというの？片手しか使えないのに？」

そう言ってわざとらしく杖をぶらぶらさせる。

「そ……それは……」

男のたじろむ姿が目につかぶ。ああ、何ていい反応をしてくれるんだろう！私は腹の中で笑いながら、目の前の男が困る様を耳で楽しんでいた。

「……あ！じゃあこうしましょう。二人で一緒に買い物に行きましょうよ」

「いやよ。何であたしがあんたと一緒に道端を歩かなきゃいけないの？」

「何だって……僕だけじゃお酒は買えないし、そもそもスーパーの場所も知らないですし……」

「……………」

そりゃそうよ。だから無理言っただけその様を楽しんでるっていうのに。

「あら、二人で行ってきたらいいじゃない」

「あ、管理人さん……」

声のした方を向くと管理人がつかつかとこちらにやって来ている。階段を上がる音なんて全然しなかった。いつからいたのよこの女狐は。

「また杏里ちゃん意地悪してたのね。駄目よ村越君を困らせちゃ」

ちつと心の中で舌打ちをかます。一番厄介な奴が出てきた。せつかく人がからかって楽しんでいたのに。

「……悪かったわよ。じゃあ一緒に行きましょう」

この女には逆らわない方がいい。杏里は杖で男の足元をつつくと、早く行くように促した。

「じゃあ管理人さん、行ってきます」

「はい、気をつけて行ってらっしゃい」

管理人のにこやかな顔が目に見え隠れ。杏里はふんとそっぽを向いて、近くのスーパー目掛けて足を速めた。

3. 竹中杏里

「ちょっと待ってくださいよ！」

僕は思わず声をあげた。一緒に行く事になったのが不満なのか、そもそもスタイルが良くて人より足が長いせいなのか。竹中杏里は盲目とは思えない速さで歩く。

「……ちゃんとレディをエスコートしなさいよね」

「す、すみません……」

少し駆け足をしてようやく信号待ちの彼女と並んだ。

「……竹中さん、本当に見えてないんですか？歩くの速すぎですよ」

「あんたが遅いのよ。えっと……名前何だっけ？」

「……村越隆一郎です」

「そうそう」

腕を組んでいる彼女の態度は明らかに不機嫌だった。

どう考えてもこの状況に腹を立てているとしか思えない。

初対面の僕に酒を買えないのに買ってこいとか、この人無茶苦茶だ。サングラス越しで目はよく見えないが、杖を持って出歩いているところによるとやっぱり目が見えてないらしい。……とてもそんな風には見えないのだが。

「……何か怒ってますねよね。そんなに僕と一緒に行きたくなかったですか？」

「別に………あんた管理人さんに気があるでしょ？」

「えっ!？」

思わぬ直球に僕は声を張り上げてしまった。

「ぷっ……あはははっ！」

彼女は馬鹿にしたように声を出して笑う。僕はその様子に恥ずかしさと怒りがこみ上げた。

「……自分の立場くらい分かってますよ、管理人さんの事情も。でも素敵な女性だと思うくらいいいじゃないですか」

「素敵な女性？あの女が？……そう思える内があんたには幸せかもね」

「？……どういう事ですか？」

「あの女には気を付けなよ。じゃ、とりあえず忠告だけしといたから」

そう言って竹中杏里はスーパーへと駆け足で入っていった。

……本当は見えているのじゃないだろうか、あの動きは。

それにしても管理人さんに気をつけろってどういう意味なんだろう……。

村越隆一郎と竹中杏里を見送った後、水木詩織は静かに部屋に戻った。

あの子……余計なことしゃべらなければいいけど。

あの様子じゃ今回は協力してくれないのかもしれない。

せっかく完璧になれたというのに、何が不満なのかしら。あの子がよく分からないわ。

洗面台に立ち、鏡で自分の顔を確認する。

……完璧だわ。やっぱり私はこうでなくては。

鏡の中の自分にニツコリすると、上機嫌で夕飯の支度に取りかかった。

「うーん……」

沼地源蔵が目を開けると、辺りは薄暗い静寂に包まれていた。

「……また先に寝てしまったのか。あの女は底なしだから敵わん」

そう言って散りばめられた空き缶を一つ一つビニール袋に入れていく。

杏里は帰ったのか？ それにしては隣が物静かだ。また遊び相手を探しに出かけているのだろう。

あの娘は変に人をからかう癖があるから面倒くさい。でもまあそこがあの娘の可愛い所でもあるがな。

溜まってきた空き缶を捨てようとサンダルを引っかけて外に出る。もう春とはいえ、夜はまだ肌寒い。ふと空を見上げると月が出ていた。

「……今夜は満月か」

そういえば、あの日の夜も満月だった。

もうすぐあの日から一年が経とうとしている。

源蔵は身震いすると、両腕を抱きかかえて急ぎ足で部屋に戻った。

「ただいま」

「……それは僕の台詞ですよ」

僕と竹中杏里はお互いに買物を済ませると、何故か二人とも102号室に帰って来た。

彼女の分の買い物袋まで持たされた僕は、玄関先で思わず倒れ込む。

「ちょっと、そんな所で座らないでよ」

僕の部屋なのに……と思いながらも、彼女のために道を開ける。

杏里は持っていた杖の先を外すと、そのまま僕の部屋に上がり込んできた。

なるほど。杖も靴を履いていたのかと感心している傍ら、杏里は家の中をぐるぐるし始めた。

「……………何してるんですか？」

「調査。何処に何があるのかと思って。でも全然片付いてないわね。参考にもなりそうにないわ」

こんなに遅くなったのは誰のせいですか。僕は半ば呆れながら目の前の光景を眺めていた。

「ねえ、今から源さんの部屋に行かない？ たっぷりつまみも調達してきたし」

「源さん?……ああ、気のいいおじさんか。でも今からお邪魔しても大丈夫ですか?僕たちは春休み中だから平気ですけど、向こうは明日から仕事があるんじゃない?……」

竹中杏里は僕が行く大学の2年先輩という事が先程分かった。

「……それもそうね。でも源さん以外にここの住人お酒飲めないから、つままないのよね」

ふてくされた様にどかっと畳の上に座り込む。

「今日は大人しく部屋に戻りましょうよ、買物袋は僕が持って行きますから」

竹中杏里に早く部屋に戻るよう促すと、今度は怒りだした。

「何?あたしがいると邪魔なの?せっかく引っ越してきたばかりで寂しいだろうから、構ってあげてるのに!」

「いや……それは大変ありがたいですけど……」

心にも思っていない事を言う。

「だいたいね、あんたがこの辺分らないからいろいろ案内して遅くなったのに……それがあたしに対する態度?」

遅くなったのは誰かのわがままのせいですけど……。

結局この日の夜は、竹中杏里の酒飲みの話し相手として終わった。

翌日僕が目を覚ますと、竹中杏里の姿は無かった。
知らない間に僕は寝てしまったのだろう。肩から掛け布団がずり落ちてきた。

「ん……………」

ふと時間を見るともう昼の十二時を回っている。

昨日彼女は何時までここに居座っていたのだろうか。部屋中酒臭い。そして空き缶が散らかっていた。僕は換気でもしようと窓を開けると、外には管理人さんがいた。

「あ……………」

「あら？…………ふふ、おはようございます」

「お…………おはようございます」

管理人さんは庭の掃除をしていたらしく、ほうきを持ってこちらに近づいてきた。

「今起きたの？すごい寝癖ですよ」

僕は慌てて手で頭を覆い尽くす。

「あはは…………昨日は疲れてしまって…………情けないです」

「いいのよ。昨日は杏里ちゃんの相手で疲れたでしょうから」

そう言って管理人さんは笑った。

「あの子わがままだけど、本当は優しいところもあるから…………時々構ってあげてね」

「はい……」

未だ冴えない頭を掻きながら、僕は昨日の事を思い出していた。
何か管理人さんについてもぐちぐち言っていた気がするが、はつきりとは覚えていない。

「では掃除が残っていますので、失礼します」

「はい、ご苦労様です」

僕は軽く頭を下げると窓を閉めた。とにかく今日も片付けに専念しよう。

……でもその前に腹ごしらえをしてこよう。軽く寝癖頭を整えると、財布を片手に僕は明るい外へ出た。

4. 岡島隼人

近くのコンビニでお弁当でも買うか。

僕が一步店内に入った瞬間に、レジカウンターから爽やかな挨拶が聞こえてきた。

「いらっしやいませ！」

「……あっ」

「あれ、村越君じゃないか」

僕の顔を見るなり岡島隼人は楽しそうに近寄ってきた。

「岡島さん、ここで働いていたんですね」

「ああ、今は春休み中だしな。稼げるときに稼いでおかないと」

岡島隼人は爽やかな笑顔で胸を張った。

「そうですね、僕もそろそろアルバイト先見付けないと……」

「お、じゃあこのコンビニで働かないか？ 確か募集はしていたと思うよ」

「本当ですか？……でも僕、高校がアルバイト禁止でして、全くやったこと無いんですけど……」

「大丈夫。だったら尚更ここで働く事をおすすめするよ。僕もここが初めてのバイト先だしね」

ぽんつと、笑いながら僕の背中を叩く。

「この店長は良い人だよ。なんてたって余った食材や、少し賞味期限が過ぎた物の持ち帰りをオーケーしてくれてるんだ」

小声でそう僕に打ち明けると、人差し指を唇にあてがった。
なるほど、一人暮らしの男にはもってこいの特典だ。

「そういえば何を買いに来たんだ？」

「あー……お昼がまだなので何か弁当でも買おうかと……」

「何だ、今日は確か昨日の余りがだいぶ残っていたはずだから、少し質の悪いので良ければご馳走するよ」

「え、本当ですか？ お金がないのでそれはありがたいです」

僕はいい所で岡島隼人と出会ったと感謝した。

「後一時間くらいで上がりだから、それまで空腹を我慢してくれればの話だけど……」

「それくらい我慢出来ます！」

「あはは、じゃあいっぱいかさらって来るよ。バイトが終わったら君の部屋に行くね」

「はい、ありがとうございます」

「すいませーん、会計お願いしまーす」

お客さんの呼声に岡島隼人は素早く振り向いた。

「はーい、じゃあまた後でね」

駆け足で自分の持ち場に戻っていった。コンビニでアルバイトも中々面白そうだ。

レジ打ちとかも一度やってみたいしなあ。……後で岡島さんにいろいろ話を聞いてみよう。

僕はとりあえず飲み物とお菓子を買い、まだ働いている岡島さんを尻目に一足先に帰った。

岡島さんが来るまでに部屋をなるべく片付けてしまわないと。昨日の誰かさんのせいで余計散らかってしまっている。

テーブルをもう一度綺麗に拭きなおしている途中で呼び鈴が鳴った。

もう一時間経ったのか。僕が慌てて玄関のドアを開けると、両手に袋を下げた岡島隼人が立っていた。

「お待ちせ腹ペコ君。まあ僕も腹ペコなんだけどさ」

「わざわざありがとうございます。まだ片付いてない汚い所ですがどうぞ……」

僕と岡島隼人は小さなテーブルに向きあって座った。さっそうと二人お弁当を開けて食べ始める。

「んーやっぱりうちの定番ハンバーグ弁当は最高だな！」

「ん！このスタミナ弁当も生姜がいい具合に効いてますよ。意外と醤油ベースで味付けがしてあって……マヨネーズでコクと旨味を引き出しているっ！」

僕は口に入れる物全てにコメントしながら食べた。

「ほう………すごいグルメ舌だな、村越君は」

岡島が一人感心したように頷く。

「あはは、味付けには少々うるさい方でして……バイトお疲れ様で

した。ありがたく頂いてます」

「お、じゃんじゃん食べていいぞ。全部俺の奢りだからな」

岡島隼人はにやっと笑うと、舌舐めずりをしながらサラダの蓋を開けた。

「いつもこんなに余るんですか？」

「うーん……日に寄りけりかな。うちの所は立地条件のせいか比較的客人が少ないみたいだしな」

「そうなんですか……それだと強盗とかに狙われやすかったりしません？」

「あはは、今時コンビニ強盗なんて逆に珍しいよ。この辺りの地域はそれほど治安悪くないしね」

「良かった……もう少し、その大学生活が落ち着いてからでもいいですか？ 僕が岡島さんの所でアルバイトするのは」

「ああ、深夜は年中募集しているようなものだしな。また働きたくなったら声かけてくれよ、店長に話通しておくからさ」

爽やかな笑顔でデザートプリンを蓋を取る。よかったこんなに良い人がお隣さんで。

街行く人は冷たかったけど、少なくともこの住人たちはみな優しいそうだ。

僕はこの住人達の出逢いに感謝しながらお弁当を平らげた。

「そういえば明日じゃないか？ 大学の入学式は」

「はい。ちよっと緊張しますね……知り合いが誰もいないというのは」

「大丈夫。俺とだってこうして仲良くなったのだから、何も心配することはないさ」

そう言いながら岡島はもう一つ弁当を開けて食べ始めた。

「そうですね……この上に住む竹中さんとも仲良く……というか話し相手にもなりましたし」

「あのわがまま女にもう目を付けられていたのか。村越君もやるなあ」

「いやいや、竹中さんは本当に分からない人でちょっと苦手です。

僕強気な女性はどうも……」

「はははっ、俺も強気でわがまま女は苦手だよ。平気でキツイ事ずばずば言ってくるしな」

「あはは……竹中さんって、目見えてないんですよね？」

「ああ、そのはずだよ……盲目を煙っているのかい？」

「いえ、そういう意味ではなくて……彼女と買物に行かされた時、歩く速さとか行動がとても盲目とは思えない感じだったので」

「性格はそうだけだな。もともとこの辺りの出身みたいだし、土地勘はあるんじゃないか？」

「そんなもんですかね……」

ふと見ると岡島は次にパンの袋を開けようとしていた。さっきも二つ目のお弁当を平らげたばかりなのに。

「岡島さん……もしかして大食いですか？」

「あはは、その通り！美味しい物が目の前にあると、ついつい手がのびてしまうんだ」

舌舐めずりをしてパンを食べ始める。

「それにしても痩せてますよね。何かスポーツでもしてるんですか？」

「いや、特には。食べ物は食べたい時に、食べるだけ食べる感じだけれどなあ」

岡島は笑って自分のお腹を叩いた。本当によく食べる人だ。僕なんてお腹ペコペコとかいいながら、弁当一つで満足していた。

「食べれる時にいっぱい食べておかないとね。もうすぐこの幸せが味わえなくなるかもしれないし」

「え？　どういう事……………」

ピリリリリリッ。

岡島の鞆から激しい受信音が鳴った。

「ごめん、…………あーもしもし？」

携帯電話を片手に慌てて外へと出て行ってしまった。

僕はその隙に改めて岡島が平らげた物を見てみた。

弁当二つにサラダ類三つ、デザート二つに先程まで食べていたパンが一つ…………あの身体の何処に消えていったのだろうか。

「ごめん村越君、ちょっと急用が入ったからこれから出かけてくるわ。残りは全部あげるからまた晩にでも食べてよ。じゃっ」

玄関先でそれだけを告げると慌てて何処かに行ってしまった。

…………どんな急用だろう。僕は不思議に思いながら、また散らかった部屋を一人片付け始めた。

5. 水木詩織

携帯を片手に握り締めながら岡島隼人は走った。

診察が終わったらとにかく電話するように言っていた。

結果がどうであれ必ず連絡をよこせと。その連絡を受けて今、近くの公園へ駆けつけた所だった。

「曜子っ！」

「隼人……………」

鼻まですっぽりと覆ったマスクをして、彼女はベンチに座っていた。手には先程出されたであろう処方箋が握られている。

隼人は畑中曜子の隣に座ると、とりあえず呼吸が収まるのを待ってから聞いた。

「先生は…………何て？」

「……………」

曜子は何も言わずに首だけを横に振った。

「もうすぐ駄目になるって……………去年のがあまり合ってなかったせいかも。とりあえず延ばせるだけ延ばしてみろって」

「そうか……………」

隼人は自分の舌を歯に当てがって確認した。

「今年は思ってたよりも早いな…………俺は今の所大丈夫そうだが」

「こう言うのも失礼だけど去年は間に合わせだったからね…………今年もアレ、するのかなあ」

曜子は俯いて自分のつま先で遊ぶ。

「さあ。俺個人的には是非して欲しいけどな。今年の質を考えてもかなり期待できそうだし」

「ふふ、一番喜んで食べてたもんね。私も最初は抵抗があったけど……隼人があんなに美味しそうに食べるんだもの、私も食べずにはいられなかったわ」

曜子はぐつと背伸びをして起き上がると、二歩進んで振り向いた。

「んー……今は何か冷たいものが食べたいかも」

「お、俺も今走ってきて喉カラカラなんだ。このままデートと行くんじゃないか」

岡島隼人は爽やかな笑顔で曜子の手を握ると、そのまま大通りに向かって歩き始めた。

「昨日は随分楽しそうだったわね、杏里ちゃん」

自分の部屋に入ろうとした所を管理人の水木詩織に呼び止められた。この女は本当突然に現れる。

足音を消す術でも身につけているのだろうか。竹中杏里は心の中で舌打ちすると、声がした方へ振り向いた。

「……どうも。管理人さん」

すたすたとこちらに近づきながら管理人は話しかけてきた。

「今ちょっと時間あるかしら？……部屋にあらせてもらってもいい？」

顔は見えないが、おそらく眉間に皺ができているであろう。そんな声のトーンだった。

杏里は散らかってますがどうぞと言って水木詩織を部屋にあげた。どうせ昨日の会話を隣の部屋から聞いていたのだろう。

私は何もやましい事はしていない。言ってもいない。

白々しい顔で水木詩織の正面に座ると、水木の方から用件を切り出してきた。

「何も話してないわよね？村越君に」

「……儀式に触れるような事は何もしゃべってないわよ。隣に見張られるのも分かってるしね」

「そう……ならいいわ。ところで杏里ちゃんの身体の調子はどう？」

「どうって、別に普通よ。今まで通りだわ」

「ふふ、あまり使ってなさそうですものね」

水木は笑いながら髪をかき上げた。

「今回は協力してくれるの？私達に」

「……………」

ここで否定すれば確実に私の居場所がなくなる。かと言ってこの女に協力する気もなれない。

杏里はしばらく黙りを通した後、付け加えるようにこう言った。

「積極的には協力しない。今回は見学だけにさせてもらおうわ」

「どうして？ やつと完璧になれたのにそんな使い方をして」

「……あたしにはあまり必要なかったからよ。やるならどうぞ、止めたりなんかしないから」

「今回はね、少し早くなりそうなの。先程先生から連絡があってね、曜子ちゃんがもう駄目になりそうなのよ」

「ふーん……」

あのほぼ引き籠もり女か。最近やたら鼻を吸ってたけど。

「今回は参加しない考えなのね、杏里ちゃんは」

「そうね……あってもなくても困らないし」

「わかったわ。時間を取らせてごめんなさいね、お邪魔したわ」

水木は立ち上がると玄関の方へと向かった。そして何か思い出したように振り返った。

「あ、源さんの調子はどうかしら？」

「……さあ。その事について何も言っていなかったから、多分大丈夫じゃないの？」

「そう、わかったわ。ありがとう」

そう言われて玄関のドアが閉まる音がした。やつと出ていったか、あの女狐め。

杏里は肩の荷を下ろしたように天井を見上げた。あの女と話しているとまるで生きた心地がしない。

しばらくぼーっとしていると、不意に源さんの事が気になり始めた。……源さんの方は大丈夫なのだろうか。

こうなったら今日も突撃するしかないな。杏里は一瞬村越も誘おうかと思ったがやめた。

先程注意を受けたのにまた齒向かう事になる。面倒くさいのはもう

こりごりだ。

椅子に座りながら後ろ手で冷蔵庫の扉を開けると、中から缶ビールを一本取り出した。

夜までの繋ぎに一本飲んでおこう。勢いよくプルタブを開けると、そのまま一気に飲み干した。

夜になり、一通り部屋を片付け終えた僕は明日の入学式の準備をしていた。

新品のスーツを箱から取り出して、胸に当ててチェックしてみる。……うん、やっぱり学ランとは違う。新人ビジネスマンの姿がそこにはあった。

「はぁ……こういう服もビシッと着こなす男になりたいなぁ」

僕は何度も鏡越しに自分の姿をチェックしてみる。いくつかかっこいい顔もキメてみる。

………管理人さんは僕のスーツ姿をどう思うのだろう。写真の中の人はどういう男の人だったのだろうか。

「……………」

僕は今、写真の中の人に嫉妬していた。

ピンポン。ピンポン。……不意に外の呼び鈴が鳴った。誰だろうこんな時間に。

僕がゆっくりドアを開けると、そこには管理人さんの姿があった。

「こんばんは、村越君」

「……………こんばんは」

管理人さんの顔を見るなり、僕は先程までしていた行動に恥ずかしさを覚えた。

「これ、お裾分けです。晩御飯にでもどうぞ」

可愛らしい袋ごと僕は受け取る。中を覗いてみると、先程まで鍋に入っていたであろう肉ジャガが顔をのぞかせた。

「わあ、ありがとうございます！僕肉ジャガ大好きなんですよ」

「ふふ、よかったわ喜んでいただけて」

「ん？……………管理人さん、もしかしてヤカンに火、かけてます？……………何か沸騰しているような音が」

「あら、いけない」

そう言いながら慌てて部屋に戻ると、また急いでこちらに戻ってきた。

「ありがとう村越君。私らしくないミスだわ、火を消し忘れるなんて……………ごめんなさい」

「いえいえ、何事も無くてよかったです」

「それにしてもよく気付いてくれたわね……………ありがとう」

管理人さんはそう言ってニッコリと笑った。……………やっぱり素敵な女性だ。

今までに出会った事のない、上品で穏やかで優しい管理人さん。

僕はすっかり管理人さんの魅力に取りつかれていた。

「管理人さんは……………その……………」

「はい」

今お付き合いしている男性は居ますか？……何てとても僕の口から
言えそうにもない。

「あ、明日も居ますかっ？」

「……………」

管理人さんはちょっとわからないと言った感じで首を傾げた。

「あ……えと……………明日入学式でして……………その……………朝、お見送り
とかしてくれませんかっ？」

僕は何を言っているのだろう。穴があつたら入りたい。

真っ赤になる僕を管理人さんは少し笑いながらも頷いてくれた。

「はい、わかりました。明日は何時にお出かけになりますか？」

「えと……………十時から式が始まるので、九時過ぎには出ます……………」

「では八時半に私の部屋に来て下さい。力が出る朝食を用意して待
っていますね」

「いえいえっ、朝食まで用意しないでいいですよ。そんな申し訳な
いです」

「朝のご飯が一番大事ですよ？遠慮せずに食べていって下さい。明
日作ってお待ちしています」

そう言ってペコリと頭を下げた。僕も慌ててそれに合わせて頭を下
げる。

何か申し訳ない注文をしてしまった。

「すみません、わがままばかり言ってしまった……………」

「ふふ、甘えたい時には甘えた方がいいですよ。ではまた明日。おやすみなさい」

「お、おやすみなさい……」

僕は深々と頭を管理人さんが部屋に戻るまで下げ続けた。

どさくさに紛れて何を言っているんだ僕は。

耳まで赤くなりながらも部屋に戻り、暖かいうちに鰹だしの良く染みた肉ジャガを平らげた。

6. 畑中囃子

翌朝。僕は早めに起きると朝からシャワーを浴びて髭を剃り、髪型をキメて昨日お披露目のスーツを着る。

……うん、中々いい感じた。時計を見ると約束の時間まで少しある。僕は一通り持ち物をチェックして、ついでに鏡の前で自分もチェックしなおしてから家を出た。

一歩外に出るといい匂いがする。隣の管理人さんの部屋からだ。この匂いはアサリの味噌汁に鯖の塩焼きって所かな。

甘くて優しい香りが漂ってきている。僕は軽く咳払いをしてから呼び鈴を押した。

「おはようございます」

「はい。おはようございます」

再びエプロン姿の管理人さんが僕を出迎えてくれた。

管理人さんの後ろではぐつぐつと完成を待ちわびる音が聞こえる。

「もうすぐ出来ますので、座ってお待ち下さいね」

「はい！」

僕は料理を器に盛る管理人さんの後ろ姿をドキドキしながら見守った。

ああ、まるで新婚さんのようではないか！僕は思わずにやけて緩んだ顔を叩きなおした。

「お待たせしました。どうぞ召し上がれ」

管理人さんはご飯と、あさりのお味噌汁と、鯖の塩焼きを乗せたお

盆を僕の目の前に置いた。

「うわぁ！こんな豪華な朝食、実家でも食べたことないですよ！」

「ふふ、村越君は大袈裟ね。冷めない内にどうぞ」

「はい、いただきます！」

僕はもう産まれてきた事に感謝でもしているような勢いで朝食を食べ始めた。

口にする物全てが美味しい。こんなに幸せな事が存在してしまっ
て良いものだろうか。

「おかわりもありますから、遠慮せずに言って下さいね」

「はい、ありがとうございます」

管理人さんが後片付けをしている傍ら、僕は部屋の中をきよろきよろし始めた。

朝のニュース番組が天気予報を伝えている。写真の中の男は今日もこちらを見て微笑んでいた。

……あれ、この写真もう少し右側になかったかな？というか写真が置いてあるキャスター自体が動いている。
その証拠に畳に動いた形跡が残っていた。

「……どうかしたの？村越君」

「あ……いえ、何でもないです。………管理人さんは手話でも勉強してるんですか？」

僕はたった今視界に入った本棚から、管理人さんに似付かわしくない手話の本を指して言った。

「え……ええ。友人に聞こえの悪い人がいてね。簡単な日常会話く

らしいか出来ないけど」

「すごいなあ。管理人さんは何でも出来て羨ましい」

「そうでもないわよ……実は自分の事が一番出来てないのよね。ふふ」

後ろ向きのまま管理人さんは答えた。家具を動かす事ぐらいあるだろう。

僕はさほど気にすることなく朝食を食べ終えた。

「ご馳走様でした。凄く美味しかったです!」

「ふふ、そう言ってもらえると嬉しいわ。入学式頑張ってね」

「はい、ありがとうございます。それでは行ってきます」

僕は管理人さんの姿が見えなくなるまで何度も手を振った。本当に優しい人だ。

僕は上機嫌で駅へと向かった。

村越隆一郎の姿が見えなくなった途端に、水木は部屋に戻った。先程彼が見つめていたキャスターを思いっきり動かす。すると壁にスイッチが現れた。

「何か感付かれたかしら……でもまあ流石にここまでは分からないわよね」

テーブルを動かし、ついでに下のカーペットもひっくり返す。畳二帖分のスペースを確保すると、水木は壁のスイッチを押した。めきめきと軋むような音を立てながら、畳がゆっくりと上に引っ張

り上げられる。

畳の下からは地下へと続く階段が現れた。

「ふう……やっぱ定期的に綺麗にしておかないと落ち着かないわ。曜子ちゃんの事もあるし、常に完璧な状態にしておかないとね」

水木はエプロンを外すと暗い、湿った空気が漂う階段へと足を運んだ。

「曜子？……おかしいなあ」

岡島隼人は201号室の呼び鈴を何度か押した。

今日は落ち込んでいる曜子を気晴らしにと映画館へ誘っていた。

約束の時間通りに呼びに来たはずなのだが、ドアの向こうでは物音一つしてこない。

「ちょっと！何度も何度もしつこいわよ！」

代わりに隣の竹中杏里が叫びながらドアを開けた。

隼人はサングラスをかけていない杏里の形相に、一瞬びっくりしたもののすぐに事情を説明した。

「どうも曜子が部屋に居ないみたいなんだ。今日は映画館に行く約束をしていたのに……」

「だからって、あたしを起こす事はないでしょ」

「すまない、悪気は無かったんだ……なあ、曜子が何処にいるか知らないか？」

二日酔いでもしているのか、頭を抱え苛立ちながら杏里は吐き捨てた。

「知らないわよ。電話はしてみたの？」

「ああ、でも電源が入ってないみたいなんだ……何かあったのかな」
俺は不安を隠せずに杏里に訴えた。無論その表情までは分かっ
てもらえそうにもないが。

「多分部屋に居るわよ。去年もこんな事あったでしょ、どいて！」

杏里はいらいらしながら曜子の部屋の前に立つとドアを激しく叩いた。

「またそうやって引籠るの止めなさいよ！こっちは朝から起こされていい迷惑なのよ！分かってんの！？」

「おい、まるで借金の取り立てみたいじゃないか！やめろよ」

隼人は杏里をドアの前から引き離すと部屋に戻るように仕向けた。
が、そんな事で言う事を聞く相手ではなかった。

「あんた彼氏でしょ、こういう迷惑かけないようにちゃんと見張っ
ときなさいよ！」

「なんだよその言い方は……お前こそ二日酔いでイライラしている
のは知らないが、こっちにまでとばっちり寄こすなよ。いい迷惑だ」
「何ですって！」

杏里が手を振りかざして殴りかかろうとしてきたので、隼人はとっ
さに手首を抑えた。

しかし尚突進してこようとする杏里に暫く応戦していると、ドアの
向こうから声が聞こえた。

「やめて……こんな所で喧嘩しないで……」

「曜子？部屋に居るのか？どうして開けてくれないんだ」

隼人はドアに耳をあてて曜子の小さな声を必死に聞こうとした。後ろで杏里が鼻で笑う。

「ほら、やっぱり部屋に居たじゃない」

「ごめんね隼人……ここからちよつと出られない」

「曜子………」

隼人は何で曜子が出てこれないのか知っていた。去年もそうだったのだ。

先に曜子の方が駄目になった。だけど早過ぎる。やっぱり合わなかったせいなのか。

「曜子………開けてくれ。このまま曜子の顔が見られないのは嫌だ。そんなに進んでしまっているのか？」

「ううん、少しだけけど……私の部屋、多分香水臭いから」

「香水……？とにかくここを開けてくれないか？」

「……………」

ドア越しに曜子に話しかけると、暫くしてドアの鍵が開く音が聞こえた。隼人は後ろにいる杏里に確認する。

「ドア、開けるぞ。お前は部屋に戻っていた方がいいかもしれない」「嫌よ。それでも曜子の事は心配してるのよ。顔ぐらい見ていくわ」

その顔ぐらいが見られないだろうが……と突っ込みたかったが、隼人は杏里の言葉にわかったと言って頷いた。

ドアノブを捻り、ゆっくり手前に引く。わずかに開いた隙間から、香水のきつい香りが顔全体を覆った。

隼人は思わず目までしっかり閉じると、一気にドアを開けた。

バラの匂いであろう塊が一気に部屋から放たれる。玄関先に座っていた曜子を、真っ先に抱きしめた。

「大丈夫か……？」

「うん………ごめん、香水きつかったよね」

「これくらい平気さ……曜子、お前マスクはどうした？」

見ると曜子はマスクをしていない。しかしその代わりに鼻が少し紫に変色していた。

「もう意味ないから……今年は思ってたよりも早かったね」

「それにしてもどうしてこんなに香水ばらまいてるのよ。換気してよ換気」

杏里は鼻を押さえてつかつかと部屋に入ってくると、勝手に窓を全部開けて、換気扇までつけてみせた。

顔を窓から出してパタパタと大袈裟に仰ぐ。

「匂いをもう感じなくて………でも今日映画館に行く約束もしていたから、香水つけて誤魔化そうとしたけど歯止めがつかなくなっ
て……」

ふと見ると曜子のそばには香水の空瓶が転がっていた。どれだけ乱用していたのかこの鼻が証明していた。

「あんたちゃんと葉は飲んだの？ここにもいろいろ転がってる見ただけどさ」

杏里は足の爪先で処方箋の袋を踏みつける。

「飲んでたわよ……でも酷い花粉症にもなったから、そっちの薬も飲んで……」

「はあ？ 自業自得じゃない」

「おい！」

「いいのよ……杏里ちゃんの言う通りだから。ごめんね、朝から不快な思いさせちゃって」

曜子が杏里に謝ると、杏里はそっぽを向いて別にと答えた。

「あの女にはもう言うってあるんでしょ？ 何とかしてもらえないの？」

「……進行を遅らせる事は出来るって言うってたけど………どの道すぐに駄目になるわ。もともと合ってなかったもの」

「そうだな……でも遅らせる事が出来るのなら、頼んでみようよ」

「ううん、止めとくわ。あまり迷惑もかけたくないし……あともう少しの辛抱だから」

そう言って曜子はニコツと笑った。

無理矢理な作り笑いだとしても、隼人には心強く思えた。

「今年は……いつやるんだろうな。去年より早めにやってくれるとは思うが」

「あはは、自分が駄目になったらに決まっているじゃない。あの女の事だもの、自分第一に決まってるわ」

「そうよね……まあそれが当たり前なんだけどさ」

曜子は自分で立ち上がると、そろそろ換気出来たかなと呟きながら換気扇を止めた。

「もうこんな時間だし……今日はここで映画鑑賞会でもしようよ」

そう言って曜子はテレビの前を片付け始めた。

「いいわね、あたしもビール片手に鑑賞しようじゃない」

「お前は鑑賞できないだろうが。そもそも上映の妨げになるから出てってくれ」

「何ですって！」

再び隼人に食いかかろうとした杏里を曜子がまあまあと言ってなだめた。

「後でビールのお供くらい持って行ってやるよ。今日は起こしてすまなかったな」

「ふん、ちゃんとよこしなさいよね」

そう吐き捨てて杏里は出て行った。隼人と曜子はお互い杏里の態度に笑った。

「あいつは優しいのか冷たいのか、よくわからない奴だなあ」

「ふふ、あれでも私は優しいと思うちゃうのよね」

7. 沼地源蔵

「源さん？……どうかしたんですか？」

同じ作業チームの仲間に声をかけられて、源蔵は自分がぼーっとしていた事に気がついた。

「すまない、ぼーっとしていた。今こいつをそっちへ運ぶから退いていろ」

源蔵はいつも通りにクラッチを踏んでクレーンを前に動かす。そしてむき出しのパイプに向かって次々と土を被せてやった。

小山が出来るくらいに土を盛ると、次は平にしてセメントを流す。もう何百回もやってきている事ではないか。何をぼけっとしているんだ俺は。

額に浮かぶ汗を拭いながら、昨日の事を思い出していた。

『源さん、身体はまだ大丈夫なの？仕事、もうそろそろお休みもらった方がいいんじゃない？』

杏里にしつこく腕の心配をされた。

源蔵は杏里に何ともないと言い張ったが、実際には使い物にならない日が近づいているのが分かっていた。

最近痺れの回数が多くなってきている。薬を飲んでもあまり効き目が無くなってきている。

曜子ちゃんはまだ駄目になったと聞いた。そろそろ俺も限界なのかもしれない。

一通りの作業を終えて車から降りると、社長室へと向かった。

また長い休暇をとらせてもらおう事にするか。同じ仲間のみんなには悪いが、このまま無理して続けるのは危険だ。

みんなにかえって迷惑がかかってしまう。源蔵は社長室のドアを軽くノックしてから入った。

「失礼します……社長、少しお話が……」

「ああ、源さんか。何だい？給料はこれ以上上げられないよ」

「いや、そろそろ長期休暇を申し込みたくて……」

「ああ、もうそんな時期かあ。病院の定期検査も大変だねえ」

「すみません、毎年毎年休みをいただいて……」

「なあに、いつも源さんにはお世話になっているんだ。事情も事情だから仕方ないだろう」

源蔵はこの社長だけにきちんと腕の手術をしていることを告げていた。

そしてリハビリに時間がかかるのも知っている。

「また元気に仕事が出来る様になったら戻っておいで。源さんの席は一応空けておくからね」

「ありがとうございます。社長が俺のおじさんで本当に良かった」

「あっはっは。俺もお前と一緒に仕事ができて嬉しいよ。さて、スケジュールの調整をしてこなくっちゃ」

「恩にきります、社長。また一緒に飲みに行きましょう」

「おお、いい店で奢ってもらわないかんの」

社長は毎年笑って俺のわがままを聞いてくれる。他の仲間達も。

こんな会社で務める事ができて俺は幸せ者だ。

この居場所、この幸せだけは失いたくない。例えばどんな手を使おうとも。

源蔵は両手を擦り合わせてまるで神にでも祈るような真似事をした。

一通り道具を綺麗に磨き終えると、水木はある男に電話をかけ始めた。

元同じ研究チームの男。私の大事な右腕。あっちも多忙な人だから、そろそろ日付だけでも決めておかないと。

「……もしもし、水木です。お久しぶりです」

『やあ水木君。久しぶり。そろそろ僕の所に電話が来ると思ってたよ。調子はどうだい？新しい人材は確保したみたいだね？』

「ええ。去年のとは違って、若くて素敵なとても良い少年よ。早く変えたいわ」

『はっはっはっ。そろそろ君の方も限界なんじゃない？去年のは質が悪かったからねえ……って今の発言は失礼だったかな？』

「いいえ。そんな心配は無用よ。先生は多忙でしょうから、そろそろ日にちだけでも決めておきたいと思ひまして」

『うーん………他の人達はどんな感じだい？』

「曜子ちゃん以外は皆大丈夫そうだけど……何とも言えないわ。まあ曜子ちゃんが一番合ってたですしね。……それと今回杏里は見学だそうよ」

『見学？ふーん……面白い事言うなあ。水木君自身は大丈夫かね？』

「まだ大丈夫そう……少し痒みがある程度よ」

そう言いながら水木は耳を掻きむしった。

『そうだなあ……ゴールデンウィークまでちょっと忙しいから、その後でもいいかな?』

「ええ、では明けた週末で考えておいてもよろしいかしら?」

『了解。君とまた組める日を楽しみにして待っているよ』

そう言い残して男の声は途絶えた。

水木は今一度自分の姿を鏡で確認すると、ポケットの中から薬を取り出して飲み込む。

後一ヶ月……か。

8. ゴールデンウィークの始まり

大学の入学式を無事終え、その後講義やらサークル活動やらで僕の大学生活は順調なスタートを切り出していた。

ようやくこの生活にも慣れだした5月。僕は最初の長い休み、即ちゴールデンウィークを迎えていた。

「村越は何処かへ遊びにいかないのか？」

バイト中商品出しをしていた所に岡島隼人が声をかけてきた。

僕は先週から隼人さんの紹介で、ここのコンビニでアルバイトを始めている。

まだまだ覚えることはたくさんあるが、レジ打ちにはようやく慣れてきた所だった。

「うーん……サークル活動は2日間入ってますけど……」

「友達とどこも出掛ける予定もないのか、寂しいなあ。実家にも帰らないのかい？」

「そうしようにもお金がないんですよ」

僕はお客さんが居ないのをいい事に棚にもたれかかった。

そんな僕に隼人は今度昼飯でも奢るからさと背中を叩く。

「そういう隼人さんは曜子さんとデートですか？」

「ああ、家で新作の映画鑑賞会でもしようと思ってるよ」

「そういえば曜子さん最近見かけないですけど……具合は大丈夫なんですか？」

畑中曜子は持病が悪化したらしく、しばらく外出は控えているとの

事だった。

隼人は俺がすっかり面倒見てるから大丈夫だよと爽やかに答えた。103号室の岡島隼人と、201号室の畑中曜子が付き合っていると知った時はかなり驚いた。

爽やか青年と、初対面時ドアを少ししか開けてくれなかった暗い女。あの後、一度隼人さんと竹中杏里も交えて4人で夕食をした事があった。

性格は全然似てないのに上手くいくもんだなあ。僕は羨ましそうに隼人を見上げた。

「何だよ、そんな目で見るなら村越も早く作ればいいじゃないか。大学には可愛い子がいっぱいいるだろう？」

「可愛い子には大抵男がいるんですよ……僕の入っているサークルの可愛い子はみんな彼氏持ちでした」

「はははっ。村越にも早く出来るといいなあ。そうだ、杏里はどうだ？」

「絶対に嫌です。振り回されるに決まってるじゃないですか……」

「確かに。じゃあどんな女性がタイプなんだい？」

そう言われて僕は真っ先に管理人さんの顔が浮かんだ。慌てて今浮かんだ人物を掻き消す。

「お……おしとやかな人がいいかなあ。日本美人みたいな感じの」

「へえ……」

そう告げるなり隼人は僕の顔を見てにやにや笑う。まるで何か言いたそうに。

「な……何で笑うんですかつ」

「知ってるんだぞ、村越。お前よく管理人さんに朝ご飯作ってもら

っているだろ」

「な……何で知ってるんですかっ？」

僕は赤くなった顔で必死に弁解しようとしたが、言葉が見つからなかった。

「よく101号室からいつてらっしゃいと、いつてきますの掛け声が聞こえるからさ。お前も隅に置けないなあ」

隼人は肘で僕を突つついた。それと同時に客が来店し、チャイムが鳴った。

「影で応援してるから頑張れよな。じゃあ残りはよろしく！」

そう言って隼人はレジカウンターへ戻って行った。

流石に隣人にはばれていたか……僕がよく管理人さんに朝食をご馳走になっている事を。

最初の入学式以来、管理人さんには何度もお裾分けや朝食を作ってもらっている。

申し訳ないと思いつながらも、その行為に甘えてしまっている僕は自分ながらに情けなく思う。

管理人さんの事ははつきり言って好きだと思う。でも今の僕にはこの関係が心地いい。

写真の男にはとても叶わない気がしているからだ。

物思いにふけっている僕を、岡島隼人はレジカウンターから見つめて呟いた。

「とんだ悪魔に恋したものだな。可哀想な奴……」

隼人より先に上がると、僕は近所のスーパーへと足を運んだ。

今日は卵が安かった筈だ。僕が卵のコーナーに行くと、そこには203号室の沼地源蔵が居た。

「あ、源さん。源さんも卵目当てですか？」

「おう、小僧。卵は何にでも使えるから便利だよな……………ちつ、お1人様1パックまでか」

源蔵は何やら真剣に卵を見比べている。……………どれも僕には同じに見えるが。

「あれ、源さんまた腕黒くなりました？」

源さんはこの間から長い休暇を利用して何処かへ出かけに行っていたらしい。

それから肘から下を日焼けして帰って来たのだが、あれから更に日焼けしてしまったようだ。

「ん……………ああ、今年は紫外線がきついな。元々黒いのが余計に黒くなっちまったぜ」

源さんがチラッと自分の腕を確認した瞬間に、持っていた卵が手から滑り落ちた。

僕がとっさに手を伸ばしたのも虚しく、卵のパックはグシャッと嫌な音をたてて床に落ちた。

「うわーっ!!」

「あっ……」

中身こそ飛び出てはいないが、パックの中で無残な状態になっている。

叫び声を聞いて駆けつけた店員に、源さんはすまないと何度か謝り、結局源さんはこの日卵を買うことが出来なかった。

「はぁー、全くついてないぜ……」

「僕が話しかけたばかりにすみません……卵半分お裾分けします」

「いいってことよ。卵くらいでくよくよする男じゃないぜ、俺は」

ポケットから部屋の鍵を取り出すと、クルクルと手で弄び始めた。

源さんは僕を部屋まで見送る最中、急にドアに挟まっていた黄色いビラに反応した。

「おい……それ……」

「あれ？何だろう……えっと、初夏のバーベキュー大会？」

源さんはその言葉を聞いた瞬間に、遊んでいた鍵を呆気無く落とした。

拾う気も無いらしくつつ立っている。

「源さん？鍵落としたよ……はい。どうしたんですか、急に」

「い……いや、何でもねえ」

そう言いながらも何だか怯えているみたいだった。

現に鍵を渡した手が微かに震えている。

「へえ、みんなでバーベキューかあ。あ、僕の歓迎会も踏まえてい

るんだ……毎年恒例なんですか？」

「あ……ああ、そうだよ。今年は少し早いみたいだな……」

そっぽを向きながら答える。……何だか源さんの様子がおかしい。

「大丈夫ですか……？何だか顔色も悪い気がしますけど……」

「大丈夫だ……ちょっと肉が食べられないんだけど……悪い、先に失礼する」

そう言って源さんは慌てて自分の部屋に帰っていつてしまった。

肉が食べられないなんて、勿体無いなあ。あんなに美味しいのに。

僕は黄色いビラをもう一度見た。

場所はこの裏庭、桜の木の下で日時はゴールデンウィーク明けの日曜日、夜6時からと記されていた。

9. お知らせ

部屋のドアを開けるなり何かが落ちた。

竹中杏里は今落ちた物を手で確認しながら拾い上げる。何だ、ただの紙切れじゃない。

またピザ屋のチラシかとその場で破り捨てようとしたが、ふと思いとどまった。

ドアに付いているポストではなく、ドアの隙間に挟まっていた。それにこの紙のサイズ……。

手でなぞって確認した後、杏里は紙切れを持ったまま隣の203号室の呼び鈴を押した。

「源さん……いる？」

しばらくしてドアの開けられる音が聞こえた。

「杏里か、今日はやけに早いな」

「源さん、これって……」

手にしていた紙切れを見せた途端に源さんが小さく悲鳴を上げた。やっぱり……あのお知らせが来たんだ。

「そんな物持ってくるんじゃない！……って悪い、分からなかったんだよねあ」

杏里は頷くと源さんとはにかく上がりなさいと部屋に通してくれた。いつもの定位置に杏里は座る。

「ごめん源さん……でも、確認したかったから……」

「お前が謝ることはない……自分のはもう破っちまったから、お前
のを見せてみる。俺が読んでやる」

杏里は紙切れを渡した。

「あー……今年も開催……初夏のバーベキュー大会。昨年よりは早
めの交流会となりますが、村越君の歓迎会も踏まえて開催致します
……場所は裏庭の桜の木の下。日時はゴールデンウィーク明けの日
曜日夜六時から。みなさん必ず参加して下さいね……だだよ」

「やっぱり……今年もやるのね。アレも」

「バーベキューって書いてあるしな。管理人はやる気満々なんだろ
う……」

「……………」

暫くお互いの間に沈黙が流れた。思い出したくもない去年の事が嫌
でも脳裏に蘇ってくる。

源さんもおそらく思い出しているのだろう。去年のはもう狂気じみ
ていた。

身内の魂を留める儀式だどうとか言っていたけど、私も源さんもあ
の日以来肉を口にしなくなった。

……………また同じ事をやる気なのか、あの女は。

「……杏里は今回、参加しないんだったよな。お前の身体、大丈夫
なのか？」

「……もともと無かった物だもの。別に無くなろうが大した問題じ
ゃない」

「そうか……まあ、あの光景を見たら嫌でもそう思うか……俺は行
為自体には賛成なんだけどな。何しろこれがないと生活が出来ない。
女房達に行かれてからは、今じゃ居場所はここと仕事場だけだ
……………」

はあ、とため息が聞こえた。

「……問題は後始末よ。去年と同じ事をまたしようとしている……あの女、悪魔よ」

「もう悪魔に魂を売ってるんだよ。でなければ平然な顔をしているわけがない」

「岡島と曜子はたぶん賛成ね……岡島に関しては絶賛してたし」

「あの青年は半分以上平らげてたからな……うつ……思い出しただけで吐き気がする」

源さんは慌てて席を立つと、台所の蛇口をひねってげえげえと何かを吐き出している様子だった。

暫くしてすまないと言う声と共に源さんが座り直す気配がした。

「悪い……不快な思いさせて」

まだ少しぜえぜえとした息遣いが聞こえてくる。

杏里は大丈夫よと言うと、テーブルを跨いで源さんの背中をさすってやった。

「すまん、ありがとう……今年は俺、気絶するな」

「去年も気絶してたわよ……あたしも途中退場したし」

「はあ……あの女、訳が分からねえ。去年は身内だからあんな事したんじゃないのかよ」

「さあ……直接聞いてみれば？あの女に。あたしは知りたくもないけど」

そう言っで見えるはずもない桜の木がある方へと顔を向けた。

バーベキューとやらが開催される前に、村越ともう一度飲んでやる

か……。

「おはようございます！」

僕は窓から顔を出すと、管理人さんが裏庭の手入れをしていた。何やら石のブロックを動かそうとしている。

「あら、村越君おはよう」

「それ、運ぶんですか？ 僕が運びますからちょっと待ってて下さい！」

僕は急いで靴を履くと、表の玄関から裏庭へと回った。

管理人さんがありがとうございますと言って僕に運ぶ先を指示した。

「これ、もしかしてバーベキュー大会に使うんですか？」

「ええ。ごめんね村越君に手伝ってもらっちゃって」

「いえいえ。力仕事なら僕に任せて下さいって……前にも同じ事言いましたね」

僕はニツコリとして次々とブロックを運んでいった。

丁寧に庭の真ん中にブロックを積み上げていく。おそらくこの上に鉄板を置いて焼くのだろう。

「本当にありがとうございます。あつと言う間に終わったわ」

「あははっ。他にも何か手伝う事ありますか？」

「そうねえ……でもあまり村越君に甘えちゃ悪いわ」

「何言ってるんですか。僕の方がいろいろ甘えているから、こうい

う時にきっちり恩返ししておかないと」

「ふふ。やっぱり男の子ね、頼りになるわ。じゃあ炎が他に燃え移らないように、この辺りの草むしりお願いしてもいいかしら？」

「はい、それくらいお安い御用です」

僕は管理人さんから軍手を受け取ると、先程積み上げたブロックの周りから草むしりを始めた。

管理人さんも少し遠くから同じように草むしりを始める。

「毎年開催してるんですか？バーベキュー大会は」

「ええ。まあバーベキュー自体は去年からなんだけどね、意外と……特に岡島君には好評だったみたいだから、今年もしようかなと」

「隼人さん見かけによらず大食いですからね……でも最近はダイエツトとか言って、全然食べてないみたいですけど」

「ふふ。でも今年は質のいい肉が手に入りそうだから、岡島君絶対食べてくれるわよ。去年も半分以上あの子が食べてくれたから」

「そうなんですか。バーベキュー楽しみだなあ……あ、食材とかどうするんですか？」

「何も用意しなくていいわよ。村越君の歓迎会も含んでいるもの。歓迎者は何も用意しなくてもいいのよ」

管理人さんは目を輝かせながら、明らかに上機嫌になっていた。

そんなに楽しみにして可愛い人だなあ……あ、僕からもみなさんにサプライズで用意しようかな。

実家からバーベキューの食材になりそうな物を送ってもらおう。

その後二人で話をしながら草むしりをしていると、三十分も満たな

い内にゴミ袋一つ分の量になった。

「はぁ、意外と草むしり疲れますね……」

「ふふ、お疲れ様。少し休憩しましょう」

僕は情けなくはぁはぁと息をこぼして地面に座り込んだ。

お尻の辺りがジリジリと熱くなってくる。僕は日陰に座ろうと桜の木の下に座ろうとした。

「やめてっ!」

いきなり管理人さんが叫んだものだから、僕はびっくりしてその場で棒立ちになった。

「あ……ごめんなさい。いきなり叫んだりして……その……桜の木には触れてほしくないの……」

「す……すみません、大切な木だということ忘れてました……」

僕は慌てて桜の木から離れた。管理人さんは首を振ってもう一度ごめんなさいと謝った。

「その桜の木にはいろいろ思い入れがあるから……ごめんなさい。

せっかく手伝ってくれたのに、怒鳴ってしまっ……」

「いえいえ。よっぽど大切なんですね、この木が……羨ましいなあ」

僕は真下から桜の木を見上げた。サリーと彫られたこいつが羨ましい。

花は既に散ってしまっているが、代わりに立派な青葉を沢山実らせていた。

「羨ましい……?」

「あっいえ、何でも無いです……この辺りも草がいっぱい生えてますけど……このままにしておきますか?」

「ええ。ごめんね村越君、ありがとう。もし時間があれば、これから冷やし中華なんてどう? いろいろ手伝ってもらっちゃったし」

「やったあ! 実はその言葉待ってました」

僕は目をキラキラ輝かせて、犬のように御主人様の後を追った。

10. 前夜祭

「いよいよ明日か……」

杏里はテレビのニュースを聞いて、今日の日付とついでに天気予報も確認しておいた。

今日からしばらくいい天気が続くらしい。絶好のお出かけ日和……ねえ。

杏里はしばらく考え込んだ後、外に出るラフな格好をして部屋を出た。

行き先はコンビニ。下が静かだったから、村越は多分バイト中だろう。

店内に入ると聞き慣れた声が飛び込んできた。

「いらっしやいませー。あ、杏里さん」

「よっ！何かつまみになりそうな物適当に入れてよ」

そう言って杏里はレジカウンター横にあるカゴを村越に突きつけた。村越はいはいと言いながら、暇だから付き合いますよと一言余計な事まで呟く。

「確かポテチ系は何でもいけるんでしたよね？」

そう言いながら幾つかカゴの中に入れていく音が聞こえる。

「何でもよくないわよ！のり塩だけはちゃんと外しなさいよ！」

村越に指図しながらお目当ての商品だけカゴに入れさせた。

「……今日はバイト、何時までなの？」

「え？……今日は夕方には上がりますけど……どうしてそんな事聞くんですか？」

「またあんたの家で飲もうと思ってね。軽い前夜祭だよ前夜祭！」

杏里は村越の肩を掴んで無理矢理お酒コーナーへと引っ張った。

「奢ってやるから、お酒部屋までよろしくな！」

「あーはいはい。じゃあ全部僕の部屋まで運んでおきますよ」

「サンキュー」

杏里は軽いスナック菓子の入った袋だけを引っ提げて店内を後にした。今日は夕方まで何しようかな。

源さんはまた今朝早く何処かへ出かけてしまったし……曜子はもう部屋に上がらせてくれそうもない。

仕方ない、部屋に帰ってもう一眠りするか。明日まともに寝られるかどうか分からないしね。

アパートの玄関口に入ると、中から車のエンジン音が聞こえる。誰だろう。

源さんが戻ってきたのかな。耳をすませていると、やがて車から誰かが降りる音がした。

誰かがこちらに気付いて近づいてくる。源さんではない。

「やあ、君は確か竹中杏里くんだね。こんにちは」

病院でも聞いたこの声。先生だ。あの女の先生がここへ来たんだ。

「……………こんにちは」

「調子はどうだね？今回君は見学すると聞いていたが、その目で

「どうやって見学するんだい？」

目の前の男は馬鹿にした口調で尋ねる。全く面倒くさい奴に巻き込まれたものだ。

開催は明日のくせに、今日は何しにここへ来たのだから。

「先生。今日はどうしてこちらへ？」

「いや、たまたま近くに用事があったからその帰りに寄っただけだよ。もう明日が待ちきれなくてさ！」

興奮したように男は地団駄を踏んだ。杏里はさっさとこいつを管理人に渡してしまおうと、101号室の呼び鈴を押した。

『……はい』

「竹中です。今先生がお見えですけど」

『あら、大変』

中からバタバタと足音が近づく音が聞こえ、やがて部屋から管理人が出てきた。

「先生！いつこちらに？連絡して下さいれば良かったのに」

「おや水木くん。君は相変わらず美しいままだね。いや、たまたま近くに来たから寄っただけだよ」

「そうでしたの。散らかっていますけど、どうぞ上がっていただきます。今お茶を入れますね」

管理人は先生を部屋に上げると、私に小声で尋ねた。

「村越君は今いる？」

「居ないわよ。彼ならコンビニでバイト中。夕方には戻ってくるよ」

うだけど」

「そう、ありがとう杏里ちゃん」

それだけ尋ねると、さっさとドアを閉めてしまった。中からまた男の興奮した声が聞こえてくる。

ちっ、とんだ仲介役をやらされたものだ。

杏里はイライラしながら階段をこれでもかと勢い良く踏みつけ上がった。

「源さーん」

杏里が呼び鈴を押した所で一向に返事の来る気配がない。まだ戻ってなかったのか。

ドアの前で聞き耳を立てたが本当に居ないようだった。

杏里はちえーっと口に出すと、メモを残して102号室へと向かった。

「ピンポーン。ピンポーン」

『はいはい』

ゆっくりとした足音と共にドアが開けられた。

「ちょっと、あたしが来たんだからダッシュで開けなさいよ」

「だったら口でピンポン言うのやめて下さいよ」

呆れ声で私を出迎える。最近村越は私に対して反論するようになった。生意気な奴。

「待ちくたびれたわ。さあ、飲もう飲もう」

「まだ六時前ですよ……僕お腹空きました」

そういつて冷蔵庫から何かを取り出して、電子レンジで温め始めた。この匂いはコンビニ弁当くさい。

「ちよつと、何一人で食べようとしてるのよ!」

杏里が叫ぶと、村越はちゃんと杏里さんの分もありますからと言って、冷蔵庫の中から何かを取り出した。冷たい袋だ。

「シュークリームです。カスタードですけど……大丈夫でしたよね?」

「あ……ああ、ありがとう」

本当は生クリームの方が好きだったがとりあえずこれで我慢するか。何だか村越のペースに押されている気がする。むかつくけど……ま、いいか。

今日は喧嘩をしにここへ来たんじゃない。

「ねえ、明日のバーベキュー大会さ……」

「はい?」

もごもごと弁当を食べながら村越は答える。

「あんたは参加するの?」

「え?……だって全員参加じゃないんですか?」

「まあ……あたしも参加するにはするけどさあ」

どうしようかな。ここで全てを洗いざらい話してやろうか。
いや、今ここで話しても信じてくれないだろう。どちらにせよ明日
全てが分かる事だ。

「あ、でも畑中さんは病気でしただけ。明日は参加出来るのかなあ」
「……………」

「……どうしたんですか？杏里さんは参加しないんですか？」

「……バーベキューは嫌いなんだよ」

「？……はあ」

「だからあたしは見学だけするの。おそらく源さんも。わかった？」
「何だかよく分かりませんが……そう言えば源さん肉が食べれない
って、言っていましたもんね」

「そうなのよ。あたしも肉はあまり好きじゃないの。なのにあの女
……また今年もバーベキューだなんて！」

「あはは、でも楽しみだなあ……バーベキュー大会。僕やった事な
いですし」

「ふん、ただ具材を焼いて食べるだけの話じゃない。ここでビール
飲んでる方がよっぽど楽しいわ」

「みんなでやるから楽しいじゃないですか。ビールだって、一人で
飲んでもつまらないでしょ？」

「ふん……………」

杏里はそっぽを向いてシュークリームをむしゃむしゃと食べ尽くす。
村越が側でくすくすと笑っているようだ。

「何よ……なんか文句あるなら言いなさいよ！」

「いえ、黙っていたら杏里さんもなかなかの美人なんだなあと……」
「あんた喧嘩売ってるの!？」

村越がいる所に向かって思いっきり平手打ちをかましたが、どうやらギリギリの所で避けられたようだった。

「ちいっ!」

杏里は勢い良く椅子に座りなおす。

村越も褒めたつもりだったんだけどなあとか言いつつ、椅子に座った。

「あんた……あの女のどこが好きなのさ？」

「えっ!」

村越は突然の質問にびっくりしたようで、急におどおどし始めた。

「ど……どこがって言われても……」

「あら? 一目惚れだったかしら？」

「いや……それもありますけど……」

「……………ふーん」

こいつまだ管理人が優しくて綺麗な人とか、どうしようもない妄想をいだいているのかしら。

だとしたらとんだ傑作だわ。まあ、その方が本人には幸せかもね。

「僕は……どこが好きかなんて具体的には分かんないですけど……たぶん自分の母親と管理人さんを、重ねてしまっているのだと思います」

「ああ、田舎からこっちへ出てきたばかりだものね。母親が恋しく

なるのもわかるわ」

「だから好きなことは好きだと思いますけど……恋人にしたいとか、
そう言うのはないです……」

「へえ……」

声のトーンからして今の村越の本心ではない。たぶんあの男がネ
ックになっているのだろう。

あの男は本当に管理人を愛していた。管理人もあの男の事を愛して
いたには違いない。

だから去年あのような処理が行われた。あの女の愛が歪んだ結果だ
ったのかもしれない。

そしてそれはとても恐ろしい愛情だった。

「ねえ……あんたは好きな人のためならさ……」

ピンポーン。ピンポーン。

喉元まで出かけた言葉呼び鈴に邪魔された。はいいと言って駆け
足で村越が玄関に向かう。

ちよっと、私の時とは随分違うじゃない！

『悪い両手が塞がってるんだ。開けてくれ』

源さんの声だ。村越がドアを開けた途端に、ガサガサと騒がしいビ
ニール袋の音と共に、源さんがこちらへなだれこんで来た。

「やあ杏里。遅くなってすまないって……あれ？珍しい、まだ飲ん
でなかったのか」

「村越に邪魔されてたのよ。今から飲もうとしてた所」

「よかった。酒のつまみに間に合ったな」

そう言って源さんは私の目の前に次々と品物を置いた。何だかいっぱいありそうだ。

「源さん今までどこに行ってたの？これもしかして全部お土産？」
「ちよっくら北の方にな。道が混んで思ったよりも遅く着いちゃったが……前夜祭に間に合ってよかったぜ」

はははと笑いながら村越と二人で次々と品物を開けていく。
明太子や佃煮、スルメ等の様々な匂いがテーブルの上で混沌としていた。

「この包み紙綺麗な和紙ですね……あ、そうだ」

村越は何か閃いたように和紙を次々と折っていく。私と源さんはそれを黙って見届けた。

「はい、出来ました」

源さんがおおっと言って凄く感心しているようだった。杏里にもと村越が折った物を手の平に乗せてもらう。
鶴だ。しかも器用な事に二羽が繋がる連鶴になっている。

「へえ。あんたにこんな特技があったとはねえ……でも何で鶴なんて折ったのさ」

「明日曜子さんも来られますようにと。病気が少しでも良くなってくれるといいなあ」

「……………小僧」

「村越……………」

なんでだろう。見えもしないのに涙がこみ上げて来るようだった。

「あれ……二人ともしんみりしちゃってどうしたんですか？」

「あんたがさせたんだよ！……っもう、飲むわよ！」

先程の自分を誤魔化すようにビールのプルタブを開ける。村越が乾杯と叫んだ。源さんも。

私も乾杯と言って一気にビールで喉を潤した。

この苦味、忘れないよ村越。ばいばい。

終、バーベキュー大会

明け方まで起きているとさすがに眠い。僕は気がつくとも布団の中で寝かされていた。

そして隣には竹中杏里が寝ていた。

「うわあ！」

僕がびっくりして叫ぶと杏里がまだ眠たそうにゆっくりと起き上がった。

「ふわああ……何、どうしたの？」

「どうしたのじゃないですよ！何で同じ布団で寝てるんですか！何か何で下着っ！」

僕は焦りながらも、ばっちり白の下着姿を確認した所で、自分も裸では無かった事に安心した。

足元の方では源さんが転がっている。まだ寝ている様だった。

「飲むと暑くなるんだよ……こんな事でいちいち大声出さないでよね………うう……頭痛い………」

そう言って杏里はまた僕の布団に、今度は独占して潜った。

昨日僕が寝る前にも散々飲み散らかしていた。その残骸が布団の周りに転がっている。

僕は眠たい頭を揺すり起こすと、昨日のゴミ回収を始めた。

源さんを踏みつけないように空き缶やら、菓子袋やらを押収する。

呆れたものだ。僕が寝てしまった後にもこんなに二人で食い散らかしていたのか。

「全く……人の部屋だって言うのにこの人達は……」

幸せそうに眠る源さんの顔を睨めつけながら一人部屋を掃除していた。

気がつけばもうお昼だ。どうりで明るいわけだと、今更に感じながら窓を開ける。

庭の中央には太陽の熱をたっぷり浴びた、そのままでも肉が焼けそうな大きな鉄板がブロック石の上で寝そべっていた。

ついに今夜かあ。僕は少し空腹を感じ始めたお腹を摩りながら、今日の晩まで何も食べないでおこうと決めた。

午後6時10分前。

僕はラフな格好で一通り戸締りを確認すると、冷蔵庫の中から先程届いたばかりのカニを取り出した。

先週母親に電話してこの日に間に合うようにと手配してもらった物だ。

バーベキューで焼けそうな食材で何か送って欲しいとお願いした所、何とズワイガニが送られてきた始末。

家がそれ程裕福ではなかった筈なのだが、これは一体どういう風の吹き回しだろう。

とにかくみんなびつくりするだろうなあ。僕は特に管理人さんが喜ぶ姿を思い描きながら、一人発泡スチロールを抱えて裏庭へ出た。

裏庭には既に管理人さんと岡島隼人に……久しぶりに姿を現した畑中曜子、沼地源蔵が居る。

竹中杏里以外全員そろっているようだった。

「お、今夜の主食の登場だな！」

「やだなあ隼人さん。それを言うなら主役ですよ」

僕は隼人のジョークに突っ込みながら庭の中央へ来た。6時とはいえどもこの時期は薄明るい。

僕が辺りを見回すと、鉄板だけが中央に構えているだけで、食材らしき物が全然見当たらない。

これからみんなで調達でもしようというわけか。

「管理人さん、バーベキューの食材が何も無いようですけど……これからみなさんで買いに行くんですか？」

「ふふ。何言ってるのよ村越君。食材ならここにあるじゃない」

「え……？」

管理人さんの素敵な笑顔を見た瞬間に、僕は何者かに背後から口元を覆われた。

世界が一瞬にして歪み、コマ送りに動き始める。

なんだ？まるでドラマで見たことあるような………？

「う……………」

眩しい。瞼をゆっくり開けると無数の光が飛び込んできた。

何だろう……まるで手術室のライトのようだ。辺りを見渡そうと身体を起こそうとするが、起きない。

手足が何かで固定されているようだ。

「あら、おはよう村越君」

管理人さんが僕の様子に気がついてこちらに近づいてきた。
白い白衣を着ている。どうしてだろう。頭が酷く痛い。

「ふふ、自分の状況が理解出来ないって顔しているわね。全く……
最高だわ！」

管理人さんが高らかに大声で笑う。何が可笑しいんだろう。
僕は、この酷い頭痛は一体どうしたって言うのだろう。

「おや？起きたかね水木君。では早速始めるとするかい？」

見たこともないおじさんが僕の側に立った。この人も白衣を着ている……何が始まるって？

「まだよ先生。最後だから全部村越君に説明したいわ。みんな、目を覚ましたわよー」

奥の扉から、ここに住む住人達が出てきた。みんなごぞつて僕を囲む。

嬉しそうに。何が嬉しいのだろう。みんなどうしちゃったのだろう。

「これから全て話すわ。しっかり聞いてちょうだいね」

管理人さんが僕を覗き込んで言う。背中が冷たい。僕は裸のようだ。
どう考えてもこの状況は異常だ。怖い。話なんてどうでもいい。
早くここから逃げなくては。早く手足を解かなくては。

僕が懇親の力を振り絞って手足をばたつかせると、何故か皆クスクスと笑う。

こいつらおかしい。変だ。みないつもの様子と違う！

「無駄だよ。君はこれから僕たちの一部になるのさ」

舌舐めずりをしながら岡島隼人が言った。

一部？という事だ？これからこの人達は何をしようとしているのだ。

「村越君は私達のスペアなのよ。そろそろ交換時期だしね」

畑中曜子がそう言いながらマスクを外す。すると変色して腐っているような鼻が姿を表した。

とても嫌な臭いがする。何で？この人達に何が起こったって言うの？

「お前には申し訳ないけどここで死んでもらう。そういう運命だったのさ」

源さん……昨日三人で打ち解け合った仲じゃないか。どうしてこいつらの味方を？

「村越君はね、ここにいる住人のドナーとしてここに来たわけ。わかった？」

管理人さんが髪を掻き上げる。すると変色した耳が現れた。

凄く膿んでいる感じだ。ドナー？どういう事？

「ふふ。ここの住人は元々機能が欠けていたのよ。私は聴覚。岡島君は味覚だったし、曜子ちゃんは……昔に酷い虐待を受けて鼻を失

ったわ。源さんは大事故で両腕切断。ここには居ないけど杏里ちゃんも生まれつき盲目だしね。……だからみんなで失った機能をスぺアで補う事にしたのよ。それが今回は村越君なわけ。わかった？」

そんなに一辺に話をされても今の僕には理解出来ない。したくない。嫌な汗がいっぱい出てくる。寒くもないのに震えが止まらない。

「でも所詮は他人の身体だから、毎年誰かと交換しないとだんだん合わなくなってくるのよねえ。薬である程度は伸ばしてみてるけどさあ」

耳を掻きむしりながら管理人さんが言った。歯が震えて言葉がうまく出せない。

怖い。誰か助けて。

源さんを見つめても只々冷たい目で僕を見据えるだけだった。

「今年は上手く人材が手に入ったけど、去年はなかなか見つからなくてねえ。しょうがないからうちの旦那で補う事にしたのよ。でも年経ってると駄目ね。今までの中で最悪だったわ。ごめんねみんな」

管理人さんがそう言うときみな口々にそんな事ないですよとかフォーローの言葉が飛び交う。

あの写真の男は病気で死んだのではなかったのか。ここにいるみんなに殺されたのか。

そして僕も写真の男と同じ運命をたどろうとしているのか。……どうしてだ。どうして僕が選ばれた。

「何で……僕……が……」

「あら、まだ口はきけたみたいね。それは私達が買ったからよ。君の両親から」

買った……？何を言っているんだこの人は。僕はこの近くの大学に通うために田舎から上京してきた。
僕の意思でここに來たのだ。

「ふふ、何か言いたそうな顔ね。この際だから教えてあげるわ。君の両親は借金をしてたのよ。私が仲介業者を通して息子さんの買取の話を持ちかけたら両親、泣いて喜んでたわ」

嘘だ……。そんな事があるはずない。僕がここへ来る時だって死ぬ程心配してくれた。

あれが全部嘘だって言うのか。

「嘘……だ……そんなの……」

「ふふ。だったら最後に両親の声でも聞いてみる？今晚移植する話はあちらにも伝えてあったから、多分家に居るでしょう」

つかつかと電話の子機を僕の所まで持って来ると、手帳を見ながら何処かにかけて話始めた。

しばらくして僕の耳元に子機が押し付けられる。

『隆ちゃん……本当にごめんなさい……ごめんなさい……』

懐かしい声だ。確かに僕のお母さんの声だった。泣いている。

『ごめんねごめんね……ひつく……つありがとう』

ツーツーと虚しく電話の回線が切れた。僕は未だ受け止められない現実に涙がでた。

そしてそれだけは少し温かった。

「大体君の頭でこんな所の大学に受かるわけ無いじゃない。全部こちらが用意した舞台よ。どう？ たった1ヶ月だったけど思う存分楽しんでいただけたかしら？」

こんなの納得出来ない。出来るはずがない。

僕がここへ来たのは親の借金の宛で、ここの人達に買われたから？
じゃあ僕の気持ちはどうなる。

こんなのみんな勝手な都合じゃないか。僕の気持ちなんて一切無視じゃないか。

「ここの住人はみな優しくかったでしょ？ まあ当たり前なんだけどね。でも村越君は本当にいい子だったわ。私がもう少し若ければ恋人にしたかったくらいよ」

冷たい細い手で僕の頬を撫でた。誰かこの現実を夢だと言ってくれ。夢なら早く覚めてくれ。

「だから今年もバーベキューをしようと思ったのよ。去年は供養も兼ねて旦那をさばいて焼いてみたんだけどね……これが意外と美味しくて！ 村越君はかなり若いから今から凄く楽しみなのよ。ねえ、みんな」

岡島隼人と畑中曜子は賛成するように頷く。ただ源さんだけが微動だにしなかった。

「亡骸はちゃんと埋めてあげるからね。サリーの下にいる旦那の隣に」

ああ。もうよしてくれ。もう何も聞きたくない。もう何も考えたくない。

僕は虚ろな目で宙を仰いだ。目の前のライトが涙で霞む。

僕はこんな所でこの人達に殺されるのか。写真の中の男もこうして殺されたのか。

「最後に村越君、何か質問とかある？ 言いたいこととかもあったりする？」

満面の笑みで管理人さんは僕を見下ろす。僕はカラカラに乾いた口で必死に訴えようとした。

「……………の」

「ん？」

「僕の……気持ち………は………？」

「気持ち？ ……ああ、私の事が好きだったみたいね。安心して。私も村越君の事好きだから。だから今度は私の耳となって一緒にいるの。完璧になるの。そしてそれは凄く素晴らしい事だと思わない？」

手を叩いてまるで子供のようにはしゃぐ。

僕はこんな人を好きになっていったのか。こんな悪魔を好きになっていったのか。

「聞くところによると村越君はかなり感覚能力の高い人間みたいね。遠くの文字が読めたり、沸騰音に気づいたり、食べただけで調味料が分かったり……………。なのにそれを上手く使いもせずに……勿体無い！ そんなの宝の持ち腐れだわ。私達ならもっと上手に使えるのに！」

皆が口々に何かを言ってきたが、もう僕の耳には届かなかった。届く必要がなかった。

すぐ隣で白衣の男がもういいだろうと呟いた。さっさと始めようと指示をする。

「じゃあね、村越君。短い間だったけど楽しかったわ。ありがとう。私は耳を貰ってくわね」

「僕は舌を。よかったな、まだカッコいいお兄さんが貰い手で」

「私は鼻を。今度こそ大事にしてあげるからね」

「俺は腕を。……すまん、許してくれ。俺の居場所には必要なんだ……」

嫌だ。死にたくない。死にたくない。誰か助けてよ。お父さん。お母さん。

ねえ、僕何か悪いことでもしたの？だから僕は売られたの？ねえ、どうして。

どうして誰も僕の意見を聞いてくれないの？ねえ、どうして。嫌だ。怖いよ。

まだ死にたくないよ。お父さん。お母さん……。

部屋の外でぼーっとつつ立っていると、誰かが階段を登ってくる音が聞こえた。

「杏里……お前ずっとこんな所にいたのか？」

源さんの声だ。杏里は振り向きもせずに聞いた。

「村越は？」

「ああ。ここにいろよ。また馴染ませるのには時間がかかるがな」

そう言って杏里に包帯でがっちり固定された腕を掴ませた。
やっぱりあんたもいなくなっちゃったんだね。正直寂しいよ。

「バーベキューはもう始まっての？」

「いや……みんなが移植し終わるのも時間かかるし、解体作業もあるからな……早くても明後日ぐらいだろう」

「へえ。せっかくな腕貰ったんだから、お礼にかじるくらいしてきたらどう？」

「いやいや遠慮しておくよ。肉はどうも食べる気がしない。また気絶しそうだしな」

源さんは笑って答えた。村越がいなくなったというのに、変な感じ。

「杏里は交換しなくていいのか？もう見えてないんだろう？」

「いいのよ。まだ見えてるから」

杏里はサングラスを外すと黒い、真っ直ぐな瞳で源さんの顔を見た。
……ついでに腕も。

「やっぱり見えてたのか。ならどうしてみんなに嘘をついたんだ」

すぐにサングラスをかけ直すと遠くを見つめる。

「ふん……あの女の顔を見たくなかったからよ。初めて見た光景が地獄よりも恐ろしい光景だったもの」

「地獄よりも……か。まあ俺達のしている事は人道から外れてるしな。閻魔大王もびっくりって所か」

「……………。まあ源さんの顔が見れたことには感謝かな。意外とカッコよかったしね」

「はは、ありがとよ。それはそうと今朝のサービスはお前らしくなかったな。白だなんて。今時の若い娘はもっと派手だろう」

「サービス？……ああ、下着姿の事？だって白が男には一番くるんでしょ？」

「ははっ、全くだい最後のからかいだったよ。また一人お前の遊び相手がなくなっちゃって……………あの小僧性格も良かったし、身体も完璧だったのにな」

「そう？私はそれなりだと思うわ。彼にはそう…………第6感…………虫の知らせが無かったのよね」

終。

終、バーベキュー大会（後書き）

いかかでしたでしょうか。この作品は初めて書き上げた処女作なので、いろいろと恥ずかしい点、矛盾している点、読みにくい所が多々あったと思います。設定も無理矢理な所があつて……；話を書くのは大変難しいですね（泣）ホラーというジャンル自体が微妙になってしまいましたが……それでも最後まで目を通して頂きありがとうございます。

それ程長い話にするつもりは無かったので、ここで終わりにしようと思います。

私のあとがきも、これで終りにしようと思います。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1608o/>

パーフェクト

2010年11月5日08時14分発行